

経皮的冠動脈インターベンション、薬物療法よりも有意な利益は認められず

安定狭心症に対する経皮的冠動脈インターベンション（以下、PCI）の目標は症状の軽減にあり、臨床的には認められている。しかしながら、その効果について、無作為化プラセボ対照二重盲検試験によるエビデンスはまだ得られていない。

本研究では、70%以上の重度の一枝狭窄が認められる安定狭心症で、虚血症状のある患者 230 例を対象に 6 週間の薬物治療を行い、その後無作為に被検者を 2 群に分け、一方には PCI を、もう一方にはプラセボ手術を行い、評価した。評価は、無作為化前と術後 6 週間後に心肺運動負荷試験、症状に関する質問票、心エコーにより行った。主要転帰は、運動時間増加量の群間差とした。結果、術後 6 週間の運動時間増加量について、両群で有意差は認められなかった（PCI 群－プラセボ手術群：16.6 秒、 $p=0.200$ ）。重篤な有害イベントとして、PCI を必要としたプレッシャワイヤー関連合併症がプラセボ群で 4 件、大量出血 5 件（PCI 群 2 件、プラセボ手術群 3 件）が報告された。

今回の研究により、安定した狭心症患者において、PCI は薬物治療と比較して狭心症の頻度について有利な利益をもたらさないことが示された。

出典：Lancet. Published online Nov 01, 2017; pii: S0140-6736(17): 32714-32719